

学会だより

第 72 回 日本消化器外科学会総会

夏越 祥次

(鹿児島大学消化器・乳腺甲状腺外科)

平成 29 年 7 月 20～22 日、金沢市で金沢大学消化器・腫瘍・再生外科学教授 太田哲生会長のもと、第 72 回日本消化器外科学会総会が開催された。3 日間とも天候に恵まれ、夏の暑さにふさわしい熱気のある学会であった。まず参加受付に行くと、浴衣姿の女性が案内役を務めており、いきなりのおもてなしにスタッフの意気込みが感じられた。おもてなしドームを中心に 5 会場が地下で通じており、非常にアクセスが便利であり、適度な距離の地下移動であるため、暑さを感じることもなかった。第 1 会場の石川県立音楽堂で開催された開会式では、オープニングセレモニーとしてパイプオルガンの演奏があった。厳かな雰囲気の中、格調高い重厚な音色は、参加者を幻想の世界に導き、金沢の伝統文化に触れることができた。

今回のテーマは「医学の既成概念に対する挑戦：Let's think outside the box」であった。この言葉は国立水戸病院名誉院長 渡辺 晃先生から太田会長に贈られた言葉であり、東京大学内科学教授、沖中重雄先生（金沢市生まれ）が最後の臨床講義で学生に贈った「教科書に書かれた医学は過去の医学であり、目前に悩む患者のなかに明日の医学の教科書の中身がある」とともに太田会長の座右の銘であると、開催の辞に記されている。プログラムの随所に、「…今後の展望」、「…手技の実際と工夫」など、既存の概念から新しい概念、さらに治療の工夫を求める内容がみられた。太田先生は会長講演で、外科総論の手術侵襲の病態・生理、周術期感染対策・栄養管理を科学的に検証すること、周術期合併症の病態にはこれまでの概念に事実誤認があること、に関して講演された。まさに今回の

テーマそのものである「医学の既成概念に対する挑戦」について、先生ご自身の臨床経験とそこから生まれた疑問に対して、基礎研究を通して解明された内容であり、大変感動的であった。

特別講演は、日本テレビ放送網株式会社、高田和男氏による「医療現場の取材メモから一消化器外科医との邂逅」、東日本旅客鉄道株式会社 小縣方樹氏による「日本の社会インフラのグローバル展開—大志をもって、世界に貢献」は聞き応えがあり、外科医を鼓舞していただく内容であり、多くの聴衆が聞き入っていた。教育講演は「巧塾」と命名された手術手技の講演で、本邦屈指の消化器外科医の芸術的な手技を学ぶことができた。

全員懇親会はしいのき迎賓館で行われ、素晴らしい風景と女性太鼓グループ、炎太鼓の力強くかつ繊細な音色が自然と調和して感動的であった。また、消防団員による加賀鳶は、威勢の良い掛け声と身軽で熟練した匠の技が披露され、大いに盛り上がった。終盤には医学生・初期臨床研修医セッションの優秀演題賞の授与式が行われ、選ばれた施設の関係者のみならず、会場にいる出席者も一丸となって若手を盛り上げていた。

本学会が成功裡に終了したことは、太田会長をはじめ教室・同門の先生方の結束力と、隅々まで行き届いたおもてなしの心が素晴らしいかったことはいまでもなく、第 73 回日本消化器外科学会総会を鹿児島市で開催させていただく私にとって、大きなプレッシャーを感じた。今回の開催でも多くの会員の皆さんの発表と参加があることを祈りながら、金沢の街を後にした。